学校物語（国吉小の巻9）

――異彩を放つ山下大将――

余木令一

さて、話を前にもどすとすれば南北両校生徒の確執（はりあい）を述べる順序となるわけだ。

南尋常小学校と北尋常小学校とは距離にしてわずか七百メートルほどである。当時は生徒同士が勉強できそうよりは、かならずといつて喧嘩をするのであつた。

従つてこれは後のことになるが南北両校の合併統一論がおこり、それが本きまりとなると、ケンカきらいの者や、腕力争いをきらつた者は、隣りの東村に、少し遠いところでは中根村にまで転校したほどであつた。

そのことは別として、乱世が英雄を生むという言葉もある通り、この争いの中にも一人の豪傑があらわれた。故人の名を持ち出してわるいが山下佐々治君がその人である。南校所属の生徒だ。体格はよし、キモツタマもすわり、腕力もすぐれ味方にとつては欠くことのできない大将格。北の生徒には「敵ながらあつぱれ」とほめそやす畏怖の的（まと）であつた。

総じて南軍（？）はいつも旗いろがわるかつたらしい。しかし彼山下君が、ひとたび採配（さいはい）をふるつて全軍を鼓舞するとき野球の試合ぢやないが九回の裏だけでも勝負を逆転してしまつたという。それほど彼はこの方面では異彩を放つていた。平治物語の源平合戦にたとえるならば、彼はさしずめ源義平の、さつそうとした武者振りをしのばしめるものがあつたと思われる。事実、山下君が先頭に立つてノツシ、ノツシとすすんでくるとき北軍は、それ大将がきたとおののき、一戦もまじえることなく等をみだして退却するようになつたという。

今に伝わる山下将軍武勇伝のおそまつは、ちようど紙面がつきました。まずはこれにとどめる次第

だでという時代だから（今だつてそうかもしれない）腕つぶしで優勝劣敗をきめたくなろうというものだ。それぞれの生徒たちは授業がおわると、よく相対峙してにらみ合いをした。あるときは一対一で、あるときは数人対数人で、時には十数人で、数十人で、ときの声をあげて入り乱れたという。

だが、これは現在の社会におけるヤクザのケンカとは本質的に異なるもので、にくしみの上での乱斗沙汰ではない。どちらが腕力が強く、いずれが忍耐力がまさつて強いかという之をたとえるならば雪合戦のようなものであつて、相手を傷つけ、たおさずんばやまずという悪質な争いではなかつた。そうはいつても、芝居ぢやあるまいし、演技をたのしんでいたのではないから、時に激（たぎ）つずれ